

北九州市立大学文学部紀要

(人間関係学科)

第 27 卷 抜 刷

保育所における子どもの愛着形成の理解と支援 その2

池田 佐輪子(西南女学院短期大学部) 楠 凡之(北九州市立大学)

To assist a child with difficulties in attachment formulation make a stable
attachment with their parents (Part2)

Sawako Ikeda (Junior College of Seinan Jyogakuin)

Hiroyuki Kusunoki (University of Kitakyushu)

北九州市立大学文学部

2020年3月発行

保育所における子どもの愛着形成の理解と支援 その2

池田 佐輪子（西南女学院大学短期大学部）

楠 凡之（北九州市立大学）

<要 旨>

池田・楠(2019)は“虐待が疑われる子ども”の“保育所における子どもの愛着形成の理解と支援”について、保育所で2年間にわたって関与観察を続けた男児の事例を紹介しつつ、考察した。

本稿では“自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder:以下 ASD) が疑われる子ども”についても、「特定の保育士（担任）との間に代替的な愛着を形成することで、子どもの望ましい発達に寄与することは可能であり、その保育士との愛着を基盤に養育者支援を行うことで子どもと養育者との愛着形成や修復にも有効に作用する」という仮説を立て、その仮説に基づいた保育実践を行った。

ASD 児の場合、定型発達児とは異なる愛着形成のプロセスを歩むことが指摘されており、その独自の愛着形成のプロセスを踏まえた支援が重要になってくると考えられる。

本研究では保育所の了解を得て、ASD 児に対する実践事例の関与観察を行った。そして、保育士と ASD 児との愛着関係とそれを通じた発達援助、そして養育者支援の取り組みの成果に関する検討を行ない、それを踏まえた今後の課題について提起した。

キーワード： ASD 児の愛着形成、代替的愛着、養育者支援

I. 問題と目的

池田・楠(2019)は、保育所での“気になる子ども”の背景にある問題の一つに乳幼児期の愛着(attachment)形成をめぐる問題があるとし、「親子の愛着形成に何らかの問題を抱えた、発達が気になる子どもに対しては、まず、特定の保育士、さらには複数の保育士との間に安定した愛着を形成することで、その子どもの発達を促すことができる」と同時に、「保育士との愛着を基盤にして子どもと養育者との関わりを支援することが、親子の愛着形成、または修復にも有効に作用する」という仮説を立てた。そして、母親の不適切な養育から母子間の愛着形成に歪みが生じ、それが通常発達に影響していると思われる男児に焦点を当て、まずは特定の保育士との間に代替的愛着関係

を構築しながら子どもの発達を促すとともに、それを基盤に養育者との愛着関係を修復、あるいは再構築することを保育目標として、2年間にわたって関与観察を行った。

この事例の関与観察と考察を通して、愛着形成に向けた担任保育士の細やかな関りから、反抗や暴力で自分の思いを通すことを誤学習していた男児は、自分の思いを言語化して相手に伝えようとすることを学び、また、自分を受容してくれる担任の期待に応えようとして、自分の感情や行動を調整しようとする姿が見られるようになってきた。

これは特定の保育士との間に安定した愛着関係が構築できれば、子どもの発達を促すことができるという仮説を検証するものであったと考える。

しかし担任保育士の働きかけにより、母親は保育所の行事にも参加して本児の成長を素直に喜ぶようになっていったものの、母親自身が母方祖母との間に安定した愛着関係を構築できなかったという「未解決の葛藤」の影響が大きく、保育士との間の愛着関係を基盤とした支援が、母子間の愛着形成や修復に効果があるという仮説については、十分な検証には至らなかった。また本児の愛着の課題を小学校へ引き継いでいくという課題も残された。

ところで、親子の愛着形成がうまくいかない原因としては、虐待やネグレクトなどの養育環境の問題だけでなく、子どもの側、あるいは親子のいずれの側にも自閉スペクトラム障害（ASD）などの発達特性が影響しており、その結果として定型発達の子どものような愛着形成の過程がうまく進まない事例も存在している。

そこで、本研究では、ASD が疑われる未診断の男児の愛着形成と発達援助に関する実践的な検討を行っていきたい。また、その際には、保育士との愛着関係を基本とした子どもの発達支援と、それを基盤とした養育者と子どもの適切な愛着の形成に向けての支援の課題と方法を考察していく。

II. 自閉症スペクトラム障害 (ASD) の子どもの愛着形成のプロセスについて

1. 自閉症スペクトラム障害 (ASD) 児の愛着形成のプロセス

杉山 (2009) は、「広汎性発達障害 (自閉症スペクトラム障害: ASD) とは、子どもの発達の途上において、発達の特定の領域に社会的な適応の問題を引き起こす可能性のある凸凹が生じたもの」と述べ、その中核的特徴として、①対人関係の質的障害、②言語、コミュニケーションの質的障害、③興味と活動の偏りをあげた。また、付随的特徴として、聴覚、触覚、味覚、痛覚などの感覚過敏を持つとした。

自閉症スペクトラム障害 (ASD) の子どもの場合、これらの発達特性の影響もあり、発達の最早期からの望ましい互酬的母子相互作用が発展せず、通常発達で見られる愛着形成とは異なる独自の愛着形成の段階を経ることが指摘されている。

ここでは、高橋 (2006)、別府 (2007) らの知見を参考にしつつ、ASD を持つ子どもの愛着形

成の段階とそこでの支援の課題を整理する。

① 第一段階：混沌の段階

この段階は認知発達的には乳児期前半（6カ月未満）にあっており、「周りの世界が自分とどのように関係するのか、他者がどのような役割を果たしてくれる存在なのかを認識できず、自他および世界のイメージは混沌としている」段階である。

この段階では呼応反応はなく、視線も合わず、表情は乏しい。叱られても知らん顔である。また、関わられることを嫌がり、模倣行動も認められない。養育者を探索することもなく、分離不安もない。

クレーン現象や有意な発声、ジェスチャーもなく、遊びは「ひたすら動き回る」、「物をなめる」など、自己の身体を含めた、モノを対象とした一人遊びの段階であり、対人遊びは困難である。ただし継続して生じる事柄を関連づけることが発達的に困難なので、日常生活におけるこだわり行動はまだ認められない。

養育者と関わることを嫌がり、養育者に対する愛着行動もあまり見られない。養育者からの働きかけも一方通行になりがちで、相互報酬的なやり取りは期待できないため、養育者はどのように関わればよいのかわからず、悲しみを感じるようになってしまうことも多い。

② 第二段階：養育者を道具としてのみ認知している段階

認知発達の面では乳児期中期（およそ6カ月～8カ月）にあたる。この段階になると、環境の変化をぼんやりと感じ、養育者が欲求を満たしてくれる存在であることは認識している。世界の変化は感じているが、何が起るのか、どのように自分が行動すればいいのかは理解できないため、前段階よりも戸惑いと不安が強くなるようである。

まれに視線は合うが、呼応反応はない。この段階は関連する事物を手がかりにした簡単な言語指示をкаろうじて理解する段階であり、ジェスチャーでの意思表示はしない。叱られると無反応か、怒るかである。前段階と同様に介入されることを嫌がり、模倣行動は認められず、分離不安、後追い行動もない。

この段階の主要な特徴的行動はクレーン現象（人の手を取り、道具のように使う行動）である。ドアノブを開けさせたりするが、開けてくれた親を見るなどの反応はない。遊びは感覚的な一人遊びが中心であり、機能的な遊びや、見立て遊びはなく、対人遊びも望まない。日常生活では、環境の変化に敏感で偏食も多くなるなど、気難しくなる。

養育者は、積極的に関わろうとしても期待した反応が返ってくることは少なく、ますます自分の子育てに迷いや混乱を感じるようになってしまいがちである。

③ 第三段階：養育者を自分にとって快を与えてくれる存在と認知している段階

認知発達の段階では一歳前程度であると推定される。一日の生活に流れがあること、ルールがあること、自分との関わりにおける家族のそれぞれの役割なども少しずつ分かってくる。しかし、いずれも認識はワンパターンであり、融通はきかない。したがって、パターンが変わると混乱したり、パニックになったりする。

数回に一度は呼名に反応する。また、繰り返しやっていることであれば、簡単な指示にも応じられるようになる。表情にも僅かな変化が見られ、叱られそうなことをするときには、母親の表情を窺うなど、「社会的参照」の行為も見られるようになる。

クレーン現象に加えて、バイバイなどのジェスチャーもするようになる。また、母親の家事動作を真似たり、通園施設で見てきた手遊びを帰宅してから突然始めたりする（延滞模倣）など、散発的な模倣行動も観察されるようになってくる。

この段階の特徴的な行動は母親への探索行動である。髪を触る、急に顔を近づけるなど、一方的で唐突であり、意図が理解されにくいものであるが、これは自閉症児特有の愛情表現の一つと理解する必要がある。身体接触的な遊びをしてもらうことを喜び、相手をしてもらうと喜ぶが、遊びを止めるとすぐ無表情になって立ち去ってしまうなど、関わり方は一方的である。分離時は無反応な子がいる一方、泣く、怒るなどの反応を見せる子もいる。しかし気持ちはすぐに切り替わる。再開時には歓迎反応が見られるようになるが、安堵反応は認められない。

またお茶をこぼす、急に髪を引っ張るなどの一方的なふざけ遊びもこの時期に目立つ自閉症児に特徴的な対人行動の一つである。わざと叱られるような行動をして、叱られると笑い、反応を楽しむ行動は自分の行動とそれに対する他人の反応が因果的に理解できるようになり、それを遊びとして楽しんでいるものと考えられる。それゆえに、強く叱るのは逆効果であり、かえって行動をエスカレートさせてしまう点には留意する必要がある。

④ 第四段階：養育者が道具的安全基地として機能している段階

この段階になると、養育者を自分に快の情動を喚起する行動を行ってくれる存在として認知する前段階の特徴に加えて、不安な状況に陥った時にもいつもしてもらっている行動を要求するようになる。この段階は次のステップに行くために非常に重要な段階である。

道具的安全基地とは、不安な状況において、養育者に具体的な行動を要求し、それをしてもらうことで安心感を得ることであるが、その過程を通じて次第に安心感を与える行動をしてくれる他者への関心と信頼が育まれていくと考えられる。すなわち、楽しいという快の情動だけでなく、安心感を得るために行動を要求するというのが前段階との大きな違いである。

たとえば、別府は、不安な場面で、養育者をブランコのところにまで連れて行き、自分が乗った

ブランコを押させるというように、自分にとって快の情動を引き起こす行動をしてもらうためだけに大人を求めていた自閉症児が、ある日、不安な状況に陥ったその子は、いつもブランコを押してくれていた大人にしがみついたというエピソードを紹介している。（別府,2009,p.39）これは、楽しいことをしてもらうためだけでなく、不安な状況で不安を緩和してくれる存在として大人を求めたことを意味しており、道具的安全基地から、依存の段階への移行を示唆するエピソードであったと考えられる。

⑤ 第五段階：養育者が心理的安全基地として機能している段階

この段階になると、呼名には確実に反応し、言葉で物の名まえがわかり、簡単な言語指示には確実に応じるようになる。生活に変化があり、予定が変わることも少しずつ理解できるようになり、切り替えも比較的スムーズとなる。また、様々な模倣行動も見られるようになる。第3段階でさかんであったふざけ遊びはあまり見られなくなり、表情にも変化が見られるようになり、視線もよく合い、母親の表情にも注目するようになる。母親への探索行動は減少し、分離不安と安堵反応が特徴的に見られるが、これは確かな“心理的きずな”の成立を示す象徴的な反応であり、母親にとっても子育てが報われたと実感できる感動の瞬間である。

日常生活の場面では、少し注意をされただけで素直に従うようになる。たとえ指示に反抗しても、自分から和解を求め、関係を修復しようとする行動もみられるようになる。このように養育者への依存心が強まり、養育者との分離に過敏になり、見捨てられ不安も生ずる。

2. 自閉症スペクトラム障害（ASD）児に特有の愛着形成を支える関わり

① 第一段階：混沌の段階

この段階では、自閉症児が混沌とした世界の中で日々を過ごしているため、少しずつ世界を秩序あるものとして意味づけていくことが必要である。よって生活を意味あるものとするために日常生活に見通しが持てるように、起床から朝食までの日課を無理のない場面からパターン化していくことが望ましい。また、その時々の子どもの欲求に沿って行動し、自分ではできずに困っているときにタイミングよく手伝ったり、お腹がすいているときには空腹を満たしたりするなど、愛着の次のステップである欲求を満たしてくれる道具的存在として養育者の存在をイメージ化できるようにかかわることが重要である。

② 第二段階：養育者を道具としてのみ認知している段階

この段階の子どもの中心的な遊びは、前段階と同様に、モノに対する感覚的な一人遊びである。機能的な遊びや見立て遊びはまだできず、対人遊びは極めて苦手である。快適な対象イメージを育

てるためには対人遊びが適しているが、物を媒介とした人との関わり遊びは困難である。したがってこの段階では前段階の関わりを継続するとともに、養育者の存在が快適な存在としてイメージできるように、楽しい感覚体験を共感的に共有できるような、くすぐりなどの身体接触の遊びや滑り台などの大きな遊具遊びが適している。

それと同時に、基本的な生活習慣や生活におけるルールの学習も大切な課題である。生活習慣の学習については到達段階を正確に評価し、次の段階を目標として取り組むなど、無理のない関わりが大切である。ただし、しつけの場面では、養育者が恐怖の対象としてイメージされないように注意しながら接することが必須であり、危険な行動を抑止する際にも、養育者へのイメージの悪化を防ぐため、注意すべき行動を限定しておくことも重要である。

③ 第三段階：養育者を自分にとって快を与えてくれる存在と認知している段階

この段階は、前段階と同様、日常生活においては融通がきかず、些細な環境の変化に弱く、新しい環境になじめなかったりして、とても気難しくなる。

よってこの段階では、身体接触遊びなど、快適な体験を共有できるような遊びを通して、養育者が快適な存在としてイメージ化されるように支援するとともに、母親は子どもにとって楽しい存在であるだけでなく、信頼できる存在であることを体験的に理解できるような援助が必要である。

保育所などに通っている場合には、分離の際の抵抗や再会の時の安堵などを有効に体験させることによって養育者と子どもとの間に頼り頼られる者としての相互関係が育つように工夫していく。

また、子どもの関心を持っていることや子どもが好きなことに対して養育者の側から関心を寄せていくことも、子どもが養育者に関心を寄せていくための第一歩として大切である。

④ 第四段階：養育者が道具的安全基地として機能している段階

道具的安全基地の段階における関わり方で重要なことは、その子どものニーズを的確に捉え、適切に応答していくことであり、そのことを通じて、自分が困った時に頼ることができる存在として他者がより深く認知されていくことが大切であろう。

また、子どもの関心を持つ遊びに養育者の方から興味を示し、寄り添うように遊びに参加するといった関わり方も、子どもとの共感関係を築いていく上では重要であると考えられる。

⑤ 第五段階：養育者が心理的安全基地として機能している段階

前段階と異なり、分離不安が高まる時期なので、分離は慎重に行いたい。自閉症児の分離不安の特徴の一つは、定型発達児が慣れない場所から分離不安が始まるのに対し、慣れた場所から始まることである。分離不安の多くは慣れ親しんだ場所から始まる。退行現象と誤解されることも多いが、

親の依存心への芽生えであると認識し、子どもの気持ちに沿った対応をしたい。しつこく注意する際にも、あまり強く叱ると見捨てられ不安が高まるので、穏やかな注意を心がけることが重要である。

このように、自分の欲求を満たしてくれる存在としての他者から、安全感を求める存在としての他者へと愛着対象のイメージが移行していくことがASDの子どもの愛着形成における特徴であり、子育てにおいてもそのような見通しを持って関わっていくことが重要になってくると考えられる。すなわち、ASDの子どものあいだで安定した愛着の関係を形成していくためには、この発達段階を理解し、そこに意図的で、明確に組織化された関わりをしていくことが必要不可欠なのである（数井・遠藤編、別府著,2007, pp.67-75）。

Ⅲ 保育所におけるASDの子どもの愛着形成と発達支援の課題と保育目標—本研究での実践仮説との関連で—

1. “発達が気になる子ども”と保育士との愛着形成に向けた保育目標

筆者ら（2019）は、虐待が疑われる“発達が気になる子ども”の愛着形成への理解と支援について検討した。（池田・楠 2019）

本研究では、ASD傾向が感じられる“発達が気になる子ども”について、まず、子どものASDの特性を理解したうえで保育目標を決め、それに基づく保育計画を立てる。

また子どもの成長・発達を促進していくためには、子どもと保育士との愛着関係を基盤としながら、子どもと養育者の安定した愛着形成へと導く養育者への支援を行うことも重要と考え、養育者支援の目標も加えた。

本研究での保育目標は以下の通りである。

①保育士との安定した愛着の形成

子どもの身体的・情緒的ケアを行いながら応答的に関わり、子どもの愛着行動を受容していくことで、保育士が子どもにとっての安全基地としての機能を果たす。

②環境刺激の統制

子どもの情報処理の許容量を超えない環境を作り、生活や活動を構造化して、子どもが落ち着いて過ごせる居場所を提供する。

③感情の言語化とソーシャルスキルの獲得への援助

子どものありのままの感情を受容するとともに、丁寧にその感情を言語化し、やり取りを通して

周囲との適切な関係調整の仕方を学習できるように援助していく。

④運動機能の向上

全身を使った粗大運動や手指を使った微細運動など、協応運動の問題も含め、遊びを通して運動能力の発達と体力の向上を図る。

⑤子どもと養育者との安定した愛着形成に向けての支援

子どもと養育者との間に互酬的なやり取りが出来るように保育士が関わりの機会を提供し、安定した愛着の形成に向けて援助をしていく。

これらの保育目標に従って保育所職員全体の共通理解のもと、特定の保育士との安定した愛着を基盤に、子どもが適切な“内的作業モデル”（Internal Working Model：IWM）を形成してソーシャルスキルを獲得しつつ、外界との関わりの範囲を広げていけるように保育実践を行う。同時に、自己肯定感も育みながら「自制心」を形成して行くことも目指す。

なお、“ASDが疑われる子ども”の場合は保育士の関わりに対して、愛着形成の初期段階では通常発達の子どものような相互報酬的な反応を返さないことが予想される。それだけに、ASD児に独自の愛着形成の段階を理解したうえで子どものあらゆる言動に敏感に応答しながら、人と関わることの楽しさを伝えていくことが重要である。また保育士によって関わり方に違いがあれば子どもが混乱するため、担任だけでなく、他の保育士も共通理解のもと一貫した保育が行えるようにする必要がある。

そして、実践過程での子どもの反応や変容を検討して次の段階に活かすようにし、保育目標の設定（Plan）→保育実践（Do）→評価（Check）→改善（Act）のプロセスを繰り返していくことで、安定した愛着の形成とそこを基盤とした発達支援が展開できるように働きかけていく。

IV【事例】 自閉症スペクトラム障害（ASD）が疑われるが、未診断の男児

以上を踏まえ、ASDの発達特性が疑われる“発達が気になる子ども”に対して、まずは特定の保育士との間に代替的愛着関係を構築しながら発達を促すとともに、それを基盤に養育者との愛着関係を修復・あるいは再構築することを保育目標として、保育所の承諾を得て関与観察を行った。

本研究で対象とした幼児は、医療機関でASDの診断を受けてはいないが、ASDの特性を強く感じる幼児である。本研究では、まず本児に関するアセスメントを行い、愛着の課題を見極めて長期的スパンの中で目標を設定し、特定の保育士と子どもの愛着形成を重視した保育実践を行い、愛着形成に向けた関わりとそれによる子どもの反応、変容、発達に注目しながら、縦断的な分析を試みた。さらに養育者との愛着形成や修復についても併せて分析した。

1. 家庭の状況

- ・家族構成 母、継父（X年度8月に結婚：本児5歳1ヶ月）、姉、本児（男児・観察開始時X年度6月：4歳11か月）、弟（再婚後に誕生）

入所当時からの本児の様子

本児は0歳児クラスより入所。慣らし保育ではほとんど人見知りをせず保育所に慣れていった。視線が合わない、表情に乏しい、話しかけに対する反応の整合性のなさが気になる子どもで、共同注意の関係も築きにくく、何を考えているのか、何に興味があるのか予想しづらいところがあった。

入所当時、母親より「離乳食は与えていないが、何でもよく食べる」という話があったが、保育所の幼児食を食べるには時期（当時9ヶ月児）が早く、偏食も多かったので、保育所で改めて離乳食を実施した。

母親は本児や保育士からの話しかけに対して非常に反応に乏しかった。本児との関わりの少なさや保育士との会話の成立のしづらさから母親自身にも自閉的傾向が感じられた。

本児と継父とは家庭と一緒に遊んでいるようで、関係は良好のようである。継父は仕事の都合がつけば保育所の行事にも参加している。

2. 観察開始段階でのアセスメント

本児は、観察開始時のX年度6月（本児4歳11ヶ月）には3、4、5歳児の縦割り編成のクラスに在籍していた。筆者は担任保育士の協力のもとでクラスの保育に参加し、本児をはじめクラスの子どもたちと関わりながら観察を行った。3歳児9名、4歳児6名、5歳児9名の計24名のクラスで、半数近くが単親（母子）家庭、大人との関わりを強く求めている子どもが多い中、本児はマイペースで過ごしていた。

本児は通常発達に比べ、社会性やコミュニケーション力の未熟さ、言葉での理解の困難さが顕著に感じられた。また、ルールより自分の興味・関心が優先し、保育士の表情や態度、また周りの様子から状況を読み取る「社会的参照」も困難であった。

落ち着いて椅子に座ることができず、視線が動いていることが多かった。集中して話が聞けないので保育士の話を理解してそれに沿った行動をとることも難しく、状況を把握してみんなと同じ行動をしようという気持ちも希薄なため、個別の説明や働きかけが必要だった。

偏食が多く小食で、食べるペースはゆっくりであった。体格は小柄で線が細く、体幹保持が十分にできず粗大運動が苦手であった。身体を使った遊びに誘っても、いつの間にか遊びからはみ出して自分の好きな遊びをしていることが多かった。また折り紙やはさみなどの微細運動はゆっくりだが好んで遊んでいた。

絵具や糊、砂場遊びや泥んこ遊びなど汚れる遊びは好まず、感覚過敏があるように感じられた。

本児は未診断ではあるが、ASD 児に特有の傾向が強く感じられ、ASD 児の愛着形成の段階から検討すると、担任を“道具としてのみ認知”している「第2段階」から“快を与えてくれる存在として認知”している「第3段階」に当たると推測された。

母親に本児の気になる様子を伝えても母親の表情は変わらず、淡々と聞いていて特に心配な様子ではなかった。本児の気ままな行動の背景には母親の本児に対する関心の低さも影響していると推測された。

3. 【1期】(X年度6月～9月：本児4歳11ヶ月～5歳2ヶ月)

(1) 保育目標

①保育士との愛着の形成

特定の保育士との間で安定した愛着が形成できるように、本児の発達特性と愛着形成の段階を理解しながら関わっていく。一緒に遊ぶ中で、関わりの楽しさや心地よさが感じられるように援助し、本児の愛着行動を引き出しながら保育士が安全基地となり、保育所が安心できる居場所となるようにしていく。

②環境刺激の統制

保育所では、できるだけ本児の感覚過敏を刺激しない環境、また情報処理の許容量を超えない環境を作って混乱を引き起こさないように援助していく。一日の生活や活動の流れを構造化し、見通しをもって安心して過ごせるように支援する。

③感情の言語化とソーシャルスキルの獲得への援助

まずは情報を的確にインプットできるように、視覚的な情報伝達の際には言葉も添えて伝えて理解を促す。同時に、本児の行動や気持ちを保育士が言語化しながら受容し、不安や混乱を取り除くように関わる。また気持ちを言語化していくことを通じて、本児が自分の感情を間主観的に認知できるようにするための土台作りを行う。

愛着対象である保育士の見守りの中で、生活や遊びの場面で具体的な見通しを持てるように援助し、保育士の手助けによって成功体験の機会を多く持たせて、ソーシャルスキルの獲得を促す。

④ 運動機能の向上

遊びの中で粗大運動・微細運動のいずれも多く経験させ、協応運動など運動機能の向上を図るとともに、体を動かすことの楽しさを十分に味わわせ、運動に対する本児の苦手意識を払拭していく。

⑤ 養育者との安定した愛着形成に向けての支援

まず保育士と本児との間で安定した愛着関係を築き、それを養育者との関係にも広げていくことを通じて、養育者とのあいだでも安定した愛着を育んでいけるように支援していく。

（2）愛着形成のエピソード “お友だちに触らないで並ぼうね”（X年度9月：本児5歳2ヶ月）

運動会の練習で入場門に並んで出番を待っているときに、周囲、特に自分の前に並んでいる子どもと、“触った、触らない”のケンカが頻発した。担任が「お友だちは触られたらイヤだと言っているよ。触らないで並ぼうね」と話すと少しの間は触れないように意識して立っているが、しばらくすると前に並んでいる子どもを触っていた。そばで見ていると本児は意識して他児を触っていた訳ではなく、列に並んで立っているのが不安定で、自分でもどうしようもなく周囲の人に触ってしまうように感じた。筆者が他児からやや離して並ばせてみたが、自分から近寄って行ってまた触ってしまう。

継父が運動会を見に来てくれることを期待しているようだったので、少しでもやる気につながればと思い、「運動会にママとパパが見に来てくれるんやろ？ 頑張って褒めてもらおうね」と話すと、その時は自分の気持ちを言葉にして、「運動会、好かんもん」と答えた。

<考察>

担任は視覚情報も活用しながら活動の説明をしているが、本児は身体が動くと同時に視線も動き、視線の先に興味を惹かれるものがあるとそちらの方に気持ちが逸れていくようだった。また、注意喚起をしても短時間で注意が転導し、自分が何をやろうとしていたのかが分からなくなるようだった。

本児は意識的に触っているわけではないので、担任や筆者に「友だちに触らないで並ぼう」と言われても納得がいかないはずである。それでも担任は日頃から本児の気持ちを受けとめてきただけに、本児には、「担任の先生は自分にとって“快”の状態を作ってくれる人」という認識があるようで、一時的にはあるが、その言葉に沿った行動をとろうとしているように思われた。本児にとって担任は、まだ十分に内在化された存在には至っていないものの、保育所内の限られた範囲では愛着対象となる存在であると思われた。それだけに、本児が安心して運動会に参加し、目標を持って楽しく取り組める活動となるためには、担任ができるだけ本児の気持ちに寄り添い、気持ちを言語化しながら関わっていく必要がある。

（3）リアセメント（保育所での関わりと関わりによる反応・変容）

保育目標に沿って本児と関わっていったが、現段階では話しかけても適切な答えが返ってこないことが多々あり、やり取りにならずに唐突に会話が途切れた。それでも日頃から本児と密に関わっている担任に対しては、自分に要求があるときや困ったことが起きたときには頼っていく姿が見られるようになっていた。しかし、まだ要求が叶うと自分の世界に戻っていき、自分の方から担任との関わりを求めたり、甘えたりといった愛着行動と思える行動はほとんど見られなかった。このような状況からこの時点ではASD児の愛着形成の第3段階にあると推測された。

運動会の色々な競技の練習に参加すること自体は嫌がらないが、進んで参加している様子ではなく、どの競技にも競争意識は感じられなかった。体幹保持が難しいため前に並んでいる子どもに触ることが多くなり、そこからふぎけ出したり、ケンカになったりすることが多かった。またタイミングを合わせられずに紅白リレーでのバトンタッチがうまくできなかった。

本児の方から積極的に関わりを持つことは少ないが、保育士や友だちとの関わりを嫌がることはなく、お互いを触り合うようなふぎけこを楽しむ姿も見られる。しかし友だちや保育士の表情を読み取る社会的参照が難しいために、限度が分からず行動がエスカレートしたり、言葉で思いを表現できず手が出てケンカになったりすることもあるため、解決には保育士の手助けが必要であった。

養育者（母親）に本児の頑張っている姿や気になる様子を伝えても母親の表情は変わらず、特に本児の発達を心配しているようではない。母親の様子からも ASD の傾向が感じられ、その情緒的応答性の低さが本児の愛着形成に大きく影響していると推測された。しかし継父は本児としっかり関わってくれているようで、本児も継父を慕っており、運動会を見に来てくれることを喜んでいる。

本児が専門機関で判定や診断を受けることができれば、保育所としても関わり方の指針が持てるが、ASD の傾向を感じながら本児と関わっている状態である。

4. 【2期】(X年度10月～3月：本児5歳3ヶ月～5歳8ヶ月)

(1) 保育目標

①保育士との愛着の形成

大人に褒められることに喜びを感じられるように、日頃の遊びや生活の中で本児との個別の関りを通して愛着関係づくりを心がける。またその関わりの中で自分の気持ちや要求を言葉にして伝えることができるように援助し、成功体験を多くすることで特定の保育士との関係を強化していく。

②環境刺激の統制

生活発表会の時期であり、みんなと調子を合わせたり、タイミングを計ったりする楽器や劇など、本児が苦手とする活動が多いことを考慮して、本児にとって無理のない参加の仕方、またできるだけ刺激を低減した環境を工夫していく。

③感情の言語化とソーシャルスキルの獲得への援助

本児の気持ちや要求をその都度言語化して共感することで、本児が自分の気持ちを客観的にとらえることができるようにする。また、担任が友だちとの仲立ちとなって一緒に遊ぶ楽しさを味わわせながら、お互いの思いを伝え合うことで関係調整していく経験を多くもたせる。

④運動機能の向上

無理なく楽しく活動的な遊びを取り入れ、全身の筋力をつけて安定した動きができるようにして

いく。

また簡単な楽器遊びを通して、友だちと一緒にリズムを合わせて演奏することの楽しさを味わわせる。

⑤養育者との安定した愛着形成に向けての支援

母親は第三子が生まれて仕事を辞めたこともあり、時間的に余裕ができたようなので、保育所での本児の活動に関心を持てるように、意図的に母親の育児努力と本児の成長の姿を関係づけて知らせ、子育てに喜びが感じられるように仕向けていく。同時に、誤解が生じないように留意しながら本児の発達特性について機会あるごとに伝え、家庭においても保育所での関わりと整合性のある関わりをしてもらえるように協力を求める。

（2）愛着形成のエピソード “褒められたい”（X年度11月：本児5歳4ヶ月）

両親と姉の見守りの中、運動会には最後まで参加することができた。筆者が運動会後に「ママやパパが褒めてくれた？」と尋ねると、「パパ（継父）が褒めてくれた。上手やったって」とすぐに笑顔で言葉が返ってきた。本児なりに運動会を頑張ったという気持ちは持てたようで、褒められたことを喜んでいて。そして自分が頑張ったと思ったことを「褒めてほしい」とアピールしてくるようになってきた。

運動会が終わって数日後の給食で、カレーの中に苦手なグリンピースが入っているのを筆者に示して、「グリンピース、食べれる！」と言って食べて見せた。“褒めてもらいたい”と期待して話しかけてきたようである。「すごいね。いつの間に食べれるようになったの？」と驚いてみせると、得意げに残りのカレーも食べて、「全部食べた」と嬉しそうにまた筆者にアピールしてきた。

生活発表会の異年齢クラスでの「ねずみのよめいり」の劇では、担任の誘いにより、本児はねずみ役を希望した。そしてまた両親に褒めてもらうことを目標に、練習でセリフや動作を覚えていった。ただし、周りの状況を見て自分の出番を判断し、友だちとタイミングを合わせてやり取りの演技をすることは本児には非常に難しいようで、一つ一つ担任が指示を出さないと動けないことが多かった。

しかし、そんな中でも、愛着対象者から“褒められたい”と言う思いは強くなっており、練習後に担任が“ねずみのよめいり”が上手にできた人のお名前を呼ぼうね。呼ばれた人は給食の準備をしていいよ」と誘うと、自分も褒められることを期待して短い時間ではあるが、姿勢を正して担任の方を向くようになった。担任は本児の集中しようとする姿を見逃さずに本児の頑張りを褒めることを繰り返していった。

<考察>

運動会で本児の継父、担任をはじめとする保育士、筆者など身近に関わっている人から褒めても

らったことがとてもうれしかったようで、そのことが、「グリーンピースが食べられるようになったことを褒められたい」という行動につながったと思われた。

本児の中で、“頑張れば大好きな担任から褒めてもらえる”と思う気持ちは育ってきているが、このエピソードの中では発表会の練習の文脈で“褒められている”ことは理解できておらず、本児にとって“褒められること”は、先程の劇を頑張ったことではなく、「今、ここでのお行儀が良いこと」のようである。このことから、本児に伝えるためには、行動を起こしたその時、その場で褒めることが重要であると感じた。褒められたことの喜びは本児の中にしっかり根付いているので、行動を起こしたときには、その場で、具体的に、短い言葉で褒められたことが理解できるように工夫していく必要がある。

(3) リアセスメント（保育所での関りとかわりによる反応・変容）

“褒めてもらうこと”を期待したり、“褒めてもらおう”と自分の行動を調整しようとしたりする場面も見られるようになり、特に担任との間に確かな愛着が形成されつつある。担任が“快を与えてくれる存在”である「第3段階」から“道具的安全基地”として機能していく「第4段階」へと成長が感じられた。また、担任だけでなく、筆者に対しても、“褒めてもらう”ことを期待する様子が見られる。

生活発表会では劇のイメージを持ちやすいよう絵本や紙芝居などの視覚情報を活用しながら取り組んでいった。また本児の希望をできるだけ取り入れ、小道具や衣装なども工夫して一緒に作ったものを使うなどし、意欲的に取り組めるように援助を行った。しかし全体の流れは理解できず、自分の出番を自分で意識できないため、促されないと動けなかった。自分の役のセリフや動作は覚えて演じることはできるが、相手との相互的なやり取りはまだ難しかった。

また、楽器遊びでは自分の希望する楽器を担当させてもらって前向きに取り組めるように働きかけたが、曲に合わせて簡単なリズム打ちをすることが難しく、合わせようと努力する気持ちも感じられなかった。

本児にとって生活発表会は日常とは異なる刺激が過剰な状態である上に、苦手な活動が多かったせいか、集中力は続かず、特に劇の出番待ちの間は常に保育士が見守っていないと他児とふざけて取捨がつかなくなった。

母親の妊娠による本児の赤ちゃん返りを心配したが、本児は母親の気を引くような言動、すなわち愛着行動はほとんど見せない。担任は生活発表会の練習で頑張った本児の姿を母親に伝えているが、母親は相変わらず無表情であった。担任は発表会の練習の様子を伝えることを通して本児の発達特性に気づいてもらい、対応の仕方や関わり方を母親と一緒に考えていきたいと考えていた。しかし、「おうちで対応に困ることはないですか？」とたずねても手ごたえは感じられず、関わり方

についての協力が得られるには至っていない。それでも継父と同居した頃から本児は落ち着いてきて、保育士の誘いかけに反応しなかったり、気ままな行動をしたりすることが減ってきた。継父との関係は良好で、家庭でもしっかりと遊んでもらって本児もなついている様子である。現時点では母親と本児との関係はこれまでと変わった様子は見られないが、母親も継父がいることで気持ちが安定し、本児に対して親密な関わりができるようになることが期待される。

5. 【3期】(X + 1年度4月～9月：本児5歳9か月～6歳2ヶ月)

(1) 保育目標

①保育士との愛着の形成

新学期、縦割りクラスの担任は変えず、引き続き担任に甘えやわがままなども含め、安心して愛着行動ができるように援助していく。褒められることを喜び、それを期待して行動する姿が見られるようになってきたので、特に担任保育士との関わりを通して活動に取り組む意欲が引き出せるように、また褒められることを励みに自分の感情や行動を調整しようとするように仕向けていく。

②環境刺激の統制

新年度になり、環境の変化によって不安定になることが予想されたので、視覚情報を活用しながら活動の流れを構造化し、本児の様子を見ながら無理なく見通しをもった生活ができるように環境を整える。

③感情の言語化とソーシャルスキルの獲得への援助

他児とのトラブルも増えているが、他児に関心を持てるようになったためと理解して、保育士の見守りの中で自分の気持ちや要求を言語化し、他児との関わり方を学習させていく。また担任との愛着関係を基盤に、他児とのトラブルの解決に向けて自分の感情や行動を調整する力も身につかせていく。

他児と関わるごっこ遊びを通して、その場面や自分の役割、他児の役割をイメージしながら楽しめるようにする。

④運動機能の向上

「できないかもしれない」と思うと参加をためらうが、既に経験したことのある体育遊びには嫌がることなく楽しんで参加するようになってきたので、本児が「これならできる」と思えるような楽しい活動を多く計画し、新たなものにも無理なくチャレンジできるようにする。

⑤養育者との安定した愛着形成に向けての支援

弟が生まれたせいも、母親の忘れ物が多くなり、母親が保育所の対応を頼ることが増えた。保育所では母親の発達特性を考慮しながらも、保育所への過度の依存を引き出すのではなく、保育所ができること、養育者がすべきことを慎重に伝えていく必要がある。さしあたっては、養育者の関

わりは子どもの成長・発達には不可欠であることを継父にも説明し、本児とできるだけ関わりをもってもらえるように協力を求めていく。また、保育所での本児の成長・発達の様子を伝えていきながら、本児の発達特性や発達課題にも気づいてもらえるようにする。

専門機関で判定や診断を受けて検査結果が分かれば、専門機関のアドバイスを受けて、より適切な関わりが期待できるので、できれば養育者の協力を得て専門機関とつなげたいが、母親は本児に問題を感じてはいない。保育所としては本児を丁寧にアセスメントして職員全体で話し合い、本児に対する共通認識を持ちながら保育を実践していく。

(2) 愛着形成のエピソード “保育参観” (X+1年度6月：本児5歳11か月)

6月に保育参観があった。本児の母親は1月に生まれた弟を抱いて参加していた。まず養育者向けの講演会が遊戯室であったので、その間、子どもは保育室で遊びながら養育者が戻ってくるのを待っていた。

自分の養育者がいつ戻ってくるのかを気にしながら遊んでいる子どもが多かったが、本児はいつもと変わらない様子で遊びを楽しんでいた。その後、母親が保育室に戻って来て、親子での活動が始まった。折り紙の“かたつむり”の制作では、母親を意識せずに自分の作業に集中し、会話する姿もほとんどなかった。給食も親子で食べたが、本児は友だちとの会話は見られるものの母親との会話は見られなかった。母親は弟に対しても話しかけたり、あやしたりすることがなかったが、弟もぐずることなく母親に抱かれていた。

<考察>

本児は母親が保育参観に来てくれたことは喜んでいようだが、そばに母親がいても甘えたり、頼ったり、できた作品を褒めてもらおうと話しかけたりすることはなかった。それは、母親とのこれまでの関わりの中で甘えたり、頼ったりという愛着行動を起こしても母親に応答してもらえないことを学習して、自らの愛着行動を抑制するようになった結果なのかもしれない。それはボウルビイの協働者であるエインズワース(1974)が“回避型”と名付けた愛着スタイルであると思われた。ちなみに、保育参観のような場面では、“回避型”と思われる親子でも日頃よりも親子の関わりが多くなる傾向がみられるが、本児の場合は、保育参観という他者の目が多くなる場面でも母親の応答性は低く、本児も母親の関わりを求める姿がほとんど見られなかった。

しかし母親は本児の姿をよく見ており、全く関心がないわけでもないことが分かった。3人の子育て経験はあっても適切な情緒的応答の経験が乏しいために、今のような姿になっているのではないだろうか。保育士が適切な関わりを伝えていき、それを母親がモデリングしていければ関係が改善される可能性を感じた。

（3）リアセメント（保育所での関わりと関わりによる反応・変容）

年長児に進級して縦割りクラスの子どもの編成は変わったが、担任は意図的に変えなかった。本児は進級しても特に落ち着かなくなることもなく、マイペースで過ごしている。しかし担任が不在で、他クラスの保育士が担当するとクラス全体が落ち着かなくなり、それに同調するように本児も落ち着かなくなる様子が見られた。

クラス担任、年長児クラス担任共に本児の姿をよく観察しており、頑張った姿を見逃さず、タイミングよく具体的に褒めている。それによって本児も自分の良さに気づき、自己肯定感が育っているように思われた。現在は褒められたいと思うだけでなく、担任の期待に応えたいと思うようになってきており、少しずつではあるが、そのための行動調整の姿も見られる。担任保育士に対して少しずつではあるが、自己主張や甘えなどの愛着行動が見られるようになり、担任が“道具的安全基地”（愛着の第4段階）だけでなく、“心理的安全基地”（愛着の第5段階）として機能しつつあると感じられる。

ちなみに筆者の期待にも応えて頑張ってもらいたいと思い、本児を様々な活動に誘ってみたが、筆者の誘いにはあまり乗ってこず、ここに担任との関わり方の差、愛着の水準の違いがあると思われた。

保育士の問いかけには言葉で応答し、自分の思いを理解してもらおうとするようになってきたので、保育士が丁寧に言語化して応答し、相手に思いが伝わることの喜びを味わえるように援助した。また絵カードなどを活用して、こちらの話も伝わりやすいように工夫しながら、言葉のやり取りの楽しさも味わえるようにしていったところ、相変わらず集中して話を聞くことは苦手ではあるが、自分もクラスの一人として行動する気持ちが芽生え、個別の声かけの必要性は確実に減ってきている。

年長児になり、3歳児の世話役をするようになったが、本児は3歳児の存在をあまり意識しておらず、しっかり者の3歳児に逆に促される場面も多かった。しかし、それを「恥ずかしい」とか「自分の方が面倒を見なくてはい」などとは思わないようである。

縦割りクラスとは別に、年長児としての活動時間も持つようにしたところ、気の合う友だちもでき、まだ並行遊びではあるが、同じ場所で遊ぶ姿を見るようになり、少しずつだが、社会性やコミュニケーション面での発達を感じられる。しかしまだ好んで一人遊びをすることも多く、そのために他児とルールを守りながら遊んだり、トラブルになった時に関係調整したりといった経験は少ないままである。特に年長児クラスでの活動では、縦割りクラス以上に本児のこだわりの強さが目立ち、本児が思いを押し通すため、友だちから不思議そうに見られることがあった。年長児の女兒にルールから逸脱したことを厳しく指摘されたこともあったが、本児は嫌そうでも辛そうでもなく聞き流していた。

年長児クラスの担任は本児の発達特性を子どもが理解できる言葉で説明し、クラスの友だちが偏

見を持たないように配慮していたが、相手の子どもも含めた関係の調整が必要であった。

弟が生まれたことの影響も多少はあるようだが、筆者が弟のことを聞いてもあまり話したそうではなく、そもそも弟にあまり興味がないようだ。母親が愛着対象として十分に機能していないため、弟の存在は本児の安心感を脅かすことはなく、特に大きな変化が生じていない。

母親にはもう少し本児に関心を持って関わってほしいと思うが、生まれたばかりの弟の子育てに手一杯の状態であり、あまり要求すると逆効果になる危険性もある。継父と本児との関係は良好なようなので、今後、本児と継父との愛着の形成と保育所への協力に期待したい。

V. まとめと今後の課題

本児は0歳児で入所当初から視線が合わない、表情に乏しい、話しかけに対する反応の整合性のなさがあり、社会性やコミュニケーション力の不足、言葉での理解の困難さが顕著にみられた。ブロックでの一人遊び、虫の図鑑を見ることなどを好み、他児と一緒に遊ぼうとする姿は見られなかった。

このような本児の様子から、保育所ではASD的な発達特性を早い時期から感じていた。周囲の人に対する関心の低さや自分の興味・関心へのこだわりなど、これらのASD的な発達特性は親子の相互関係の成立を著しく困難にし、適切な愛着形成を阻害していたと考えられる。

また本児のこのような状態には母親自身の情緒的応答性の低さも大きく影響していることが当初から感じられた。母親は本児や保育士からの話しかけに対して不自然なほどに反応に乏しく、本児との関わりの少なさや保育士との会話の成立のしにくさから母親自身にもASDの傾向が感じられた。

本児の生来的な発達特性による愛着の形成の困難さと、母親自身の発達特性からくる、我が子の感情やニーズを読み取ることの困難さが重複することによって、本児の他者との情緒的なコミュニケーションを築いていく力の発達が著しく遅れた可能性は否定できないように思われる。

そこで保育所では本児の発達特性を考慮した意図的で明確なねらいをもって働きかけてきた。すなわち本研究での仮説に基づき、まずは担任が本児に対して丁寧働きかけ、“担任は自分にとって心地良い状態を作ってくれる人”“楽しいことをしてくれる人”という認識を本児が持てるように意図的に関わっていった。このような関わりの積み重ねを通して、本児は担任に頼れば問題が解決できることを学んでいったようで、担任には甘えやわがままといった愛着行動をみせるようになり、4歳児クラスの終わり頃には担任とのあいだでは“心理的安全基地”の段階に到達したと考えられる。

さらに、年長児になり、本児にも役割が与えられ、その役割を果たして保育士から認められることで達成感や満足感を感じられるようになり、先生から褒められることを期待して自らの行動や感

情を調整しようとする姿も見られるようになってきた。また、他児との関わり楽しさも味わえるようになり、一緒に遊ぶ姿も見られるようになってきている。もちろん、年長児の「協同遊び」の中に入ると、まだまだ相手の思いがうまく理解できずにトラブルになることが多いが、年長児担当の保育士の見守りの中で自分の思いを言葉にしながら相手との関係調整の仕方を日々経験できている。

現在の保育所での本児の様子を観察していると、生活習慣はほぼ実年齢の段階まで身につけており、運動面での不器用さはあるものの、特に問題を感じるほどではない。また言語理解についても話す内容を理解することはできていた。しかし仲間集団との関係では相手とのやり取りは成立しにくく、意図したことがうまく伝わらないことは依然として多い。生活や遊びの中で本児の発達を援助していく際には、本児の発達特性を理解した丁寧な支援が必要である。

一連の取り組みを通じて、本児にとって、担任の保育士が“心理的安全基地”として機能するようになり、担任に褒められることを期待して自分の行動や感情を調整しようとする姿が見られるようになったことは、課題は残るものの、「特定の保育士、さらには複数の保育士との間に安定した愛着を形成することで、その子どもの発達を促すことができる」という仮説を検証するものであったと考える。

しかし、保育士と本児との間で成立した愛着関係を母親との関係にも広げていくことを通じて、本児と母親とのあいだに安定した愛着を育ていけるように支援するという目標については、十分な成果をあげることができなかった。母親に本児の保育所での様子を伝えても反応は乏しく、そもそも母親は本児との関係で、関わりにくさや不安全感と言った問題を感じておらず、保育所からの働きかけの意図が伝わっていないように思われた。

しかしながら、年長児クラスでの生活発表会（X+1年度12月：本児6歳5か月）では、本児がステージ上から母親を見つけて嬉しそうに手を振る姿に母親が答える様子が見られた。母親は写真やビデオも熱心に撮っており、隣に座っていた他児の母親ともステージを見ながら話をする姿も見られた。小学校就学前になってようやく、保育所が母親との間に安定した愛着が育つようにと援助してきた成果が現れてきたように思われた。

母親は生活発表会の帰りに「この子、小学校に行っても大丈夫でしょうか」と担任に話しかけていた。本児の保育所での生活や成長の様子を母親の状況を考慮しながら地道に伝えていったことから、生活発表会での本児と他児との姿を見て、ようやく母親も問題意識を感じたようであった。

新しい父親と本児との関係は良好なようなので、今後は母親だけでなく、継父との愛着の構築にも期待しつつ、本児とできるだけ関わってもらうよう協力を求めていき、可能であれば、本児の発達の様子を伝えながら、本児の発達特性や発達課題にも気づいてもらえるように働きかけていくことが必要であろう。

本事例では、当初から本児の ASD の発達特性を考慮した関わりを進めると同時に、母親についても、支援の途中から ASD の可能性を考慮して意図的に関わってきたが、やはり保育所としての支援には限界があることも痛感してきた。

専門機関で判定や診断を受ければ、専門機関のアドバイスも参考にしつつ本児への適切な関わり方を検討できるので、養育者の協力を得て専門機関の診断を受けてもらいたかったが、就学直前の段階でも専門機関への受診は困難な状況であった。

それゆえに、就学後、小学校の担任教師との間でも、本児が保育士との間で育んできたような良好な愛着関係が築かれ、本児への援助が途切れることなく続けられるように小学校との連携を進めていくことも重要な課題であった。とりわけ本児の場合、幼児期の自我・社会性の発達課題を積み残したかたちで就学を迎えることになるだけに、小学校の担任教師や特別支援教育に関わるスタッフに本児の課題をしっかりと引き継ぎ、本児が小学校の教員との間でも、保育士との間で築いてきたような良好な愛着関係を形成しつつ、その関係を基盤にして「自制心」をはじめとする自我・社会性の発達課題を克服していけるように連携を進めていくことが必要な事例であったと考えられる。

引用・参考文献

- ・別府哲 2007 「自閉症における他者理解の機能連関と形成プロセス」 全国障害者問題研究会
障害者問題研究 34(4) 259 - 266
- ・初塚真喜子 2010 「アタッチメント（愛着）理論から考える保育所保育のあり方」
相愛大学人間発達学研究（1） 1 - 16
- ・J. ボウルビィ 1981 「母子関係の理論」 岩崎学術出版社
- ・J. ボウルビィ 1993 「母と子のアタッチメント 心の安全基地」 医歯薬出版
- ・K・H・ブリッシュ著、数井みゆき・遠藤利彦・北川恵監訳 2008 「アタッチメント障害とその治療」 誠信書房
- ・数井みゆき 2001 「乳幼児期の保育と愛着理論：子どものよりよい発達を求めて」 母子研究（21） 62 - 79
- ・数井みゆき・遠藤利彦編著 2005 「アタッチメント」 ミネルヴァ書房
- ・数井みゆき・遠藤利彦編著 2007 「アタッチメントと臨床領域」 ミネルヴァ書房
- ・鯨岡峻 2012 「エピソード記述を読む」 東京大学出版会
- ・鯨岡峻 2013 「なぜエピソード記述なのか」 東京大学出版会
- ・楠凡之 2012 「自閉症スペクトラム障害の子どもへの発達援助と学級づくり」 高文研
- ・日本自閉症スペクトラム学会編 2005 「自閉症スペクトラム児・者の理解と援助」 教育出版
- ・榊原洋一編著 2009 「アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助」 ミネルヴァ書房
- ・庄司順一・奥山真紀子・久保田まり 2008 「アタッチメント」 明石書房
- ・白石正久・白石恵理子編 2009 「教育と保育のための発達診断」 全障研出版部
- ・杉山登志郎 2009 「講座 子どもの心療科」 講談社
- ・高橋脩 2006 「自閉症と ADHD の愛着の発達について」 そだちの科学(7) 66 - 72
- ・田中昌人・田中杉恵 1996 「あそびの中にみる各年齢児 全6巻」 大月書店
- ・吉田敬子 2000 「母子と家族への援助」 金剛出版
- ・吉田敬子 2006 「育児支援のチームアプローチ」 金剛出版
- ・米澤好史 2019 「愛着関係の発達の理論と支援」 金子書房
- ・米澤好史 2018 「やさしくわかる！愛着障害」 ほんの森出版
- ・渡辺久子 2000 「子育て支援と世代間伝達」 金剛出版
- ・渡辺久子 2008 「母子臨床と世代間伝達」 金剛出版

Abstract

To assist a child with difficulties in attachment formulation make a stable attachment
with their parents (Part2)

SAWAKO IKEDA(University of SEINAN JYOGAKUIN) HIROYUKI KUSUNOKI(University of KITAKYUSYU CITY)

Ikeda・Kusunoki reported and considered an example of a boy who has been observed at a nursery for 2 years about understanding and support of child attachment at a nursery school for suspected abuse in 2019.

On this paper, two hypotheses about children who may have autism spectrum disorder (ASD) are constructed and childcare is practiced based on the hypotheses.

The first hypothesis is that it is possible to contribute to the desirable development of the children with ASD by forming alternative attachments with specific nursery teachers.

In addition, support for caregivers of the children with ASD based on the attachment with the nursery teachers can be effective in the formation and restoration of attachment between the children and the caregivers.

In the case of children with ASD, it has been pointed out that the process of attachment formation is different from that of typical developmental children. Thus, it is important to provide support based on understanding the unique process of attachment formation.

In this study, with the consent of the nursery school, we do participant observation of the practice cases of children with ASD. We also examine the results of attachment with the children and the nursery teachers, the development support through it, and the support of the caregivers; we then raise future issues based on them.

Key Words: Attachment Formation of Child with Autism Spectrum, Alternative Attachment, Support for Caregiver